

[論文]

コロナ禍のタンザニアの「異端」化を読み解く

杳掛沙弥香

くつかけ・さやか

1. はじめに

タンザニアの新型コロナウイルス（以下、コロナ）感染症対策は、「異端」¹⁾として国際社会で頻繁に取り上げられ、日本でも話題となった。その「異端」の対策を牽引した同国のマグフリ（John Pombe Joseph Magufuli）大統領が2021年3月17日に死去したことが公式に発表されると、コロナ軽視の言動を繰り返し、コロナ・ワクチンを陰謀と示唆していたことなどを併記する形で、各国の報道機関などがこぞって報じた（遠藤2021; BBC 2021b; Busari and Princewill 2021など）。

本稿では、コロナ禍で行われたマグフリ大統領の演説を対象とし、批判的談話研究を行うことで、タンザニアのコロナ対策が「私たち」と「彼ら」の対立を喚起させる言説の中に取り込まれ「異端」化していく様子を明らかにする。本稿がコロナ禍のタンザニアを対象とし、マグフリの談話²⁾を分析するにあたっての目標は2つある。まず、日本において「奇行」³⁾として好奇の目を向けられ、マグフリの死をもって国際社会に「勸善懲悪」的な単純化された理解の中で消費されたコロナ禍のタンザニアの状況について、政治的・社会的コンテキスト及びマグフリによる権力と支配のあり様への理解を踏まえた上での解釈を提供することである。その上で、コロナ禍のタンザニアの状況が世界に対

して突きつける「問い」の内実について考察を行う。

2. 方法と分析対象

批判的談話研究（以下、CDS）⁴⁾は、一定の理論的モデルや方法論をもつ1つの学派をさすのではなく、現代社会の不平等な力関係を内包した談話を批判的に分析するという認識のもとで発達してきた一連の談話分析研究をさすものである（野呂2001: 17）。CDSの特徴は、「言語」を「社会的実践」とみなす点にあり（Fairclough and Wodak 1997: 258）、その焦点は、権力の乱用や支配の（再）生産における談話の役割にある。CDSは、提示される談話の言語形式から引き出される表面的な意味だけを扱うのではなく、それを構成する多元的なコンテキストに意識を向け、そこに埋め込まれた権力性を具体的な社会との関連の中で問題視する（野呂2001: 17-18）。そのため、コロナ禍に至る前のタンザニアにおいて、マグフリの談話がどのような状況や制度、社会的構造によって形を与えられ、同時に、それらに形を与えてきたかについて、次節で概観する。

また、本稿は、スワヒリ語で行われたタンザニアの大統領の演説を分析対象としているが、筆者はスワヒリ語のいわゆる「ネイティブ」でも、その社会の内部者でもない。その点で、本研究はそもそもの限界を抱えているが、本稿の目的は、マグフリの談話によって構築された権力を批判し解体しようとするものではなく、それによって構築されてきた社会的認知構造などを明らかにすることで、スワヒリ語話者ではない外部者がコロナ禍のタンザニアで何が起こっていたのかを理解し、さらにそれが突き付ける問題について考えることを可能にすることである。

本稿で分析対象としたのは、マグフリ大統領がタンザニアのコロナ対策方針などに関して正式な声明を発表した2020年3月22日からコロナ収束宣言として報道された6月7日までの演説（第1波期）と、2021年1月4日から大統領の動静が途絶えた2月27日の間に行われた演説（第2波期）である⁵⁾。それらは主に、日曜礼拝や閣僚などの就任式、来賓として出席した式典などで行われたもので、一部、あるいは大部分でコロナが主題となっている。演説がいつどのような状況で行われたかは本来重要な要素となるが、マグフリ政権下ではマ